Rainer Maria Rilke

ドイツの名作　**神さまの話**

1974年4月25日　第2版発行

訳　者　河原忠彦・竹内豊治
　　杉浦　博

訳者との
契約により
検印廃止

発行者　前　田　完　治
発行所　株式会社　三修社
　　〒113　東京都文京区本郷2－26－11
　　電話　東京（813）4031（代）
　　振替　東京　72758番

定価800円

印刷所　有限会社　萩原印刷所
製本所　協栄製本株式会社

Rainer Maria Rilke

ドイツの名作

リルケ

神さまの話　河原忠彦訳

マルテの手記抄　竹内豊治訳

新詩集抄　竹内豊治訳　河原忠彦訳

ドゥイーノの悲歌抄　杉浦　博訳

オルフォイスによせるソネット　杉浦　博訳

三修社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

神さまの話　河原忠彦訳　9

エレン・ケイに与う…10／神さまの手の話…11／見知らぬ人…21／神さまはなぜ貧しい人びとのいることをお望みなのか…26／どうして裏切りがロシアにはいって来たか…31／老いたティモーファイが歌いながら死んでいったこと…37／正義の歌…44／ヴェネツィア、ユダヤ人街の一景…55／石にきき入る男…62／指ぬきがどうして神となったか…66／死のおとぎ話と奇妙なあとがき…73／切実な要求から生まれたクラブ…81／乞食と誇りたかい少女…91／闇に告げた話…97

マルテの手記　抄　竹内豊治訳　109

新詩集　抄　竹内豊治訳　219

日時計の天使…219／豹…219／白鳥…220／レース…220／ローマの噴水…222／メリー・ゴー・ラウンド…222／生けてある薔薇…223

新詩集別巻 抄　河原忠彦訳　226
古代のアポロのトルソ…226／ヴェニスの晩秋…226／薔薇の内部…227／鏡の前の貴婦人…228／読む人…228
ドゥイーノの悲歌 抄　杉浦 博訳　229
第一の悲歌…231／第五の悲歌…236／第九の悲歌…242
オルフォイスによせるソネット　杉浦 博訳　249
第一部…251／第二部…277
解説・リルケ年表　杉浦 博　307

神さまの話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

わたしのともよ。

かつてこの本をお手もとにさしあげたとき、あなたはどなたよりも、こよなくこの本を愛してくださいました。

それで、この本はあなたのものと、わたしはいつも考えてまいりました。それゆえ、このたびの新版では、あなたにさしあげる一冊ばかりでなく、どの本にもあなたのお名をしるすことを、お許しください。

そして、こう書かせてください。

神さまの話、エレン・ケイのもの

ローマ　一九〇四年四月

ライナー・マリーア・リルケ

神さまの手の話

つい先日、朝のことだったが、わたしは隣の奥さんにばったり出会った。わたしたちは挨拶をかわした。

「すばらしい秋でございますね」

しばらくして、奥さんはこう言って空を見上げた。わたしもそれにみならった。たしかにその朝は、よく晴れわたって、十月にしては珍しい朝であった。わたしはふと思いついたことがあって、

「いい秋ですね」と、大きな声をあげ、手をちょっと振りまわした。すると隣の奥さんも、調子をあわせるように何度もうなずいた。わたしは奥さんの、そんな仕種をしばらく見まもっていた。善良な、健康そうな顔が上下に揺れるのが、じつに見ていて好ましかった。ほんとうに明るい顔であった。ただ唇のあたりと、こめかみの付近に、小皺ができて、わずかな陰をつくっていた。どうしてできたのだろう、そう思うと、わたしはだしぬけにこう尋ねた。

「小さいお嬢さんたちは？」

顔の皺は一瞬消えたが、すぐにまた、もっと暗く皺がよった。

「おかげさまで元気にしておりますが――」と、言って、隣の奥さんは歩きだした。わたしも、こんどは礼儀上、奥さんの左側に沿って歩いた。

「まあ聞いてくださいませ。あの子たちは、一日じゅう何やかや尋ねる年ごろになりまして。何でしょうね、それが一日じゅうで、もう寝てほしい夜になってまで、つづくのでございます」

「そうでしょうね。時期というものがありますからね……」と、わたしはつぶやいた。

だが奥さんは、わたしの言葉などにわずらわされなかった。

「それが、まあどうでしょう、この鉄道馬車はどこへ行くのとか、お星さまはいくつあるのとか、一万ってたくさんより多いことなのとか、そんなことではございませんの。まるで別のことなんですの。たとえば、神さまは支那語もお話しになるのかとか、神さまはどんな姿をしていらっしゃるのかとか、みんな、いつも神さまのことばかりでございます。そんなこと、まさか知っているはずがありませんわね」

「そりゃあ、そうですが」と、わたしも調子を合わせたが、

「こういう場合、ある種の推測もできますね……」と言った。

「そうかと思うと、こんどは神さまのお手のことなどききだしまして。そんなときどう申したらいいものやら——」

わたしは隣の奥さんの目をのぞきこんだ。

「失礼ですけど」と、わたしはていねいに言いだした。

「いまあなたは、神さまのお手とおっしゃいましたね。そうでしたね」

隣の奥さんはうなずいた。奥さんは自分から言いだしながら、かえって、どきっとした様子だった。

「そうですね」——わたしはいそいで言葉をついだ。

「神さまのお手のことは、少しは知っていることがありますのでね。偶然でしたが」

奥さんが目をまるくするのを見たとき、わたしはあわてて言った。

「いや全くの偶然でしたね。わたしは……そこで」わたしはもうかなりきっぱりと話を結んだ。

「わたしの知っていることを、お話しいたしましょう。しばらくお暇があれば、お宅までごいっしょにまいりましょう。それだけあれば、お話も終えられるかと思いますが」

やっと奥さんに口を開かせたとき、奥さんはまだ驚きからさめずにおろおろと言った。

「どうぞ。でも子どもたちに直接お話しになってくださいません……?」

「わたしが、お子さんたちに話すんですか。それはいけません、奥さん。とてもだめです。ねえ奥さん、わたしがお子さんたちに話すことになると、たちまちわたしはとまどってしまうのです。それだけでも、もういけませんが、お子さんたちは、わたしがまごまごしているのは、きっと自分で嘘をついているのを知っているからなんだと思うでしょう……お話の真実ということが、わたしには何より大切なのですから。——お子さんたちには、あなたからもういちど話してやってください。あなたのほうがずっとうまくおできになりますよ。話をつなぎあわせたり、飾りたてたりもなさるでしょう。わたしはただ簡単な事実だけを、ごく短い形でお伝えします。それでよろしいでしょう」

「ええ、けっこうですわ」と、隣の奥さんは、ぼんやり言った。
わたしはじっと考えこんだ。
「太初に……」
だがすぐ中断して、
「奥さん、あなたにお話しするときには、お子さんたちにはまず話しておかねばならないいろいろのことも、もちろん知っていらっしゃることと、きめてかかってよろしいでしょうね。たとえば宇宙創造のこととか……」
かなり間があって、それから、
「ええ――そして七日目に……」そう答えた人のよい奥さんの声はかん高かった。
「ちょっとお待ちになって」と、わたしは言った。
「やはり、はじめの七日間のことを思い出してみましょう。七日までのことが大事なんですから。神さまは、ご存じのように、まず大地をつくることから仕事をお始めになりましたね。大地を水からお分けになり、光あれよとお命じになりました。それから驚くべき速さで、いろいろのものをおつくりになりました。つまり現にあるような大きな物たちです。岩や、山や、一本の樹や、それを形どったたくさんの樹々です」
さきほどからもう、背後に足音が聞こえていた。わたしたちを追い抜きもせず、遅れもしない、それがどうも耳ざわりで、次のように話しつづけたとき、わたしはつい、宇宙創造の話の複雑さに巻きこまれていた。
「こんなにすばやい、みのり豊かな活動は、長い深い熟慮の結果、おはじめになる前に、神さまの頭の中に何もかもすっかりできあがっていたとでも考えなければ、とうてい理解できません……」
とうとう足音のぬしがわたしたちと並んだ。あまり気持ちのよくない声が、わたしたちの耳にはりついた。
「あら、シュミットさんのおうわさなんでしょう。まあ失礼しましたわ……」
わたしはそばによって来た婦人のほうをこわい目で見た。隣の奥さんはひどく当惑して、
「えっ」と、せきばらいをして、こう言った。
「いいえ――あの――そうですわ、わたしたちの話はちょうどまあ――」
「いい秋ですわね」
あとから来た婦人は、とつぜん何事もなかったように、小柄な顔をまっかにほてらせて言った。
「ほんとうに――」と隣の奥さんの返事が聞こえた。

「ヒュッパーさん、おっしゃるとおり、まれにみる、美しい秋ですわ」

それから婦人たちは別れた。ヒュッパー夫人はまだくすくす笑いながら言った。

「ではお子さんたちによろしく」

隣の、ひとのよい奥さんは、これにはもう耳をかさなかった。やはりわたしの話を聞きたくて、好奇心をもやしていたのだ。

しかしわたしはわけもなく片意地をはって、こう言いはった。

「そうだ、どこでつかえてしまったのか、もう忘れてしまいましたよ」

「ちょうど、神さまの頭のことを何かおっしゃっていらっしゃいましたわ。つまりその——」こう言って奥さんはまっかになってしまった。

それを見ると、奥さんがほんとうにかわいそうになった。わたしは早口で話しはじめた。

「そうだ、こうなんですよ。物だけしかおつくりにならなかったあいだは、神さまはたえず地上をごらんになっている必要もなかったのです。なぜといって、地上では何の事件も起こるはずがなかったのですからね。そりゃあ、風は、もうまえまえから顔なじみの雲とよく似ている山々の上を吹きわたっていましたが、それでも樹々の梢は、まだなんとなくうさんくさく思って、避けて通っていました。神さまのお目からみると、それはしごく当然のことでした。神さまはいわば、物を眠っている姿にこしらえられたのですからね。しかし動物たちのことになるともう、お仕事はいよいよおもしろくなりはじめました。神さまはその上に身をかがめて仕事に熱中なされ、太い眉をあげて、地上をきっとごらんになるのは、ごくまれなことになりました。まして、人間をおつくりになったときには、大地のことは、すっかり忘れておられました。人体の複雑な部分のどの辺まで、神さまのお仕事はすすんでいたのでしょうか。そのときふいに、神さまのまわりでざわざわと羽ばたきの音がしました。ひとりの天使が、かたわらをとびすぎて、

『すべてを見たもう神は……』と歌いました。

神さまはびっくりされて、すぐさま天使を罰しておしまいになりました。なぜといって、この天使は見たこともないいつわりを歌ったのですから。

父なる神は、すばやく地上を見おろされました。すると、いうまでもなく、そこには、ほとんどとりかえしも

つかぬ事がもう起こっていました。一羽の小鳥がおびえたように地上をあちらこちら飛び迷っていました。神さまは、その小鳥を助けて、もとの巣へかえしてやることができませんでした。このかわいそうな鳥が、どこの森からやって来たのかごらんになっていなかったからです。神さまは、ほんとうにご立腹になって、こう申されました。

『鳥どもは、置かれたところに、とまっていなければならない』と。しかし、そのとき、鳥たちに翼を与えたのがご自身であることを思い出されました。それも天使たちの、地上にも自分に似たものがいるようにという、たっての望みをかなえておやりになったからでした。こんなこともお考えになると、いよいよ腹立たしくなってこられました。

こんなお気持ちのときには、仕事ほど効能のあるものはありませんね。神さまは、人間をつくるお仕事に没頭されてじっさいすぐにまた、ほっとされました。

神さまは、天使たちの目を、まるで鏡のように、前にお立てになり、これに写して、ご自分のお顔を測り、膝の上で球形の土をゆっくり、たんねんにこねあげて、最初の人間の顔をおつくりになりました。額はうまくゆきました。二つの鼻の穴を左右対称につけるのは、はるかにむずかしく、神さまはいよいよ深く身をかがめられて仕事に没頭なさいました。するとまた頭上に風が吹きだしたので、神さまはお目をあげられました。さきほどの天使が、まわりをとび回っているのでした。こんどは、賛歌は聞こえませんでした。いつわりを歌ったために、この天使の声はつぶれていたのです。しかしその口もとをごらんになって神さまは、この天使があいかわらず『すべてを見たもう神』と歌っているのをお認めになりました。

するとちょうどその時、神さまのご信任のとくべつ厚かったニコラウス聖者が、神さまにお近づきになって、大きなひげの中からこう言われました。

『神さま、あなたの獅子どもは悠然と寝そべっています。まことに不遜きわまる生物です。そう申さずにはおれません。だが、小犬のほうは地球のふちをすれすれに駆けまわっています。ほら、あのテリヤです。すぐにも落ちるでしょう』

すると、神さまは、明るく、白いものが、まるで小さな光のかたまりのように、スカンジナビア地方の、もうその辺はひどくまるまるとしたふちを、あちこちとはね

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.